
asymmetry blue

m-ktrg

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

a s y m m e t r y b l u e

【Nコード】

N 4 1 8 1 V

【作者名】

m - k t r g

【あらすじ】

双子の姉の夢が潰えた。慰めたいのに、言葉が見つからなかった。双子なのに、繋がっているのに、落ち込んだもうひとりの自分が理解出来ない。だから、かねてより姉が行きたがっていた海で、男はゆっくりと向き合うことにした。

10分程で読める、ちよつといい話。

路線案内を見ることなく、自販機に万札を一枚入れ、金額上限の切符を二枚買った。

具体的な行き先なんて無かった。『そっち』の方面に進めば、いつかは『そこ』に着くだろーうと思い、適当に電車に乗った。

電車が揺れている間、交わす言葉は無かった。その代わり、僕はずっと、隣の姉さんの手を握っていた。

やがて……聞いたことのない駅名だけど、窓から目的の景色が見えたから、そこで降りた。

自動改札機は無かった。改札口で、老いた駅員に切符を手渡した。切符の値段を確かめることなく、僕らを通してくれた。

小さくて古びた駅構内は、薄暗かった。だから、四角い出口が、まるでそこだけを切り取ったように白かった。

外に出た。陽射しが眩しくて、手で遮った。姉さんは、日傘を差した。時期のせいかな、陽射しの割りにそれほど暑くは無かった。

陽はすっかり高かった。朝に出たのに、着いたのは昼過ぎのようだった。

駅からは、緩やかな下り坂がひとつ延びているだけだった。

姉さんの手を引いて、坂を下りた。僕に周りの景色を楽しむ余裕は無かった。グイグイと、子供が母の手を引くように、早足で下りた。

「ちよつと！ 兄さん！」

姉さんが、少し慌てていた。僕には、それが面白かった。

坂を大分下ると、目的のモノが見えた。

緩やかな風が、磯の匂いを運んできた。

「ほら、姉さん。海だよ！」

「わぁ……」

見下ろすと、一面に広がる青い海。見上げると、一面に広がる青

い空。

青と、青。

そして、ずっと遠くに、それを確かに二分する境界線が見えた。

a s y m m e t r y b l u e

あの日の夜。

ふと、姉さんの泣き声が聞こえて、僕は目を覚ました。

耳に直接届いたんじゃない。僕のではない強烈な感情が、悲しみが、内側からどつと溢れてきた。

双子ならではの、特殊な繋がり。不思議な感覚。僕までが泣きそうになった。

僕はベッドから起き上がると、眠気と得たいの知れない悲しみを引きずりながら、姉さんの部屋へと向かった。

「姉さん。おかえり」

扉をノックしないで開けた。

暗い部屋で、月明かりに照らされて ベッドでは、頭からシーツに包まった姉さんが、小刻みに震えていた。

僕はまだ頭がはつきり目覚めていないせいか、その光景に現実味があまり無かった。でも、内側から流れてくる感情が、かろうじて繋ぎとめた。

「……ダメだったの？」

もうわかり切っていることなのに、わざわざ問うのは酷だと思う。それでも、信じられなかった。信じたくなかった。

「……」

すすり泣く声だけが、微かに聞こえた。沈黙の肯定だった。

夢の、お終い。

いつも、自分の夢を誇らしげに語っていた姉さん。
いつも、自分の夢へと努力を重ねていた姉さん。

いつも、自分の夢が叶うと信じていた姉さん。

それが、こうして現実には否定された。

実に呆気なかった。結果を突きつけられただけで、終わってしまった。
「……」

ここまでの過程を、頑張ったねと褒めようとして 思い留まった。
そんなモノに意味は無い。そうやって傷を舐めたところで、どう

にもならない。

姉さんが僕の中を、そう否定した。

そう。もう幼い子供じゃないんだ。僕たちに必要なのは、社会が
求めてくるのは 結果だけだ。それが総てだ。

姉さんの夢は砕けた。その事実を見つめないといけない。

でも……それを、僕はどうしたらいいんだろう。どう言葉をかけ
ればいいんだろう。

双子なのに。もうひとりの僕なのに。繋がっているのに。姉さん
と同じく沈んだ気持ちなのに。

姉さんの内側を探れなかった。姉さんの欲しい言葉がわからなかった。
「ごめんなさい……」

姉さんは、ぽつりと漏らした。

僕の頭の中が、漠然と伝わったんだろう。僕が困惑しているのは、
自分のせいだと思っているんだろう。

「違うよ、姉さん。そうじゃないんだ……」

咄嗟に否定するものの、やはり言葉は続かなかった。

「……今は、存分に泣きなよ」

僕は、開いた扉に突っ立ったまま、そう慰めることしか出来なか

った。

怖かった。触れなかった。震える肩を抱くことも、溢れる涙を拭くことも……今の僕には、どうにも出来なかった。

姉さん自身を、理解出来ないんだから

だから、そつとすることにした。それが一番だと思った。

でも、何かが引つかかった。僕のではない気持ちに、僕は首を横に振った。なんだか釈然としない。ぼくには納得出来ない。

姉さんが僕を、もうひとりの自分を通じて、自分にそう言い聞かせようとしていたのかもしれない。

それで片付けようとするのは、僕には許せなかった。

「姉さん。あのね」

苛立ちから、口が勝手に開いた。

加速する感情とぼんやりした頭で、何かを考える余裕は無かった。自分の内側から自然と、言葉が出ていた。

それこそが、僕の本心だったんだろう。

姉さんの欲しい言葉がわからないように、僕の本心も、自分ではよくわからなかった。

*

海に正面を向け……白い砂浜の真ん中で、僕は腰を下ろした。姉さんも日傘を畳み、隣に座った。

僕は姉さんの手に自分のを重ねた。姉さんは拒まなかった。

ザア、ザア、と……波の音が、耳に触れていた。

「……こんな所に連れてきて、どういふつもりよ？」

「姉さん、海を見たいって言ってたじゃないか。……ちよつと遅く

なっただけさ」

夏に言っただことだった。まだ僅かに暑いけど、今はもう……浜辺には、僕らふたり以外に誰も居なかった。

少し季節外れの、物寂しい景色。姉さんが望んでいたものとは、違うと思う。

でも……今の僕らには、これくらいが丁度いいのかもしれない。

「ふざけないで。そうじゃないでしょ？」

「……だって、姉さん最近、無理してるんだもん」

「してないわよ。兄さんの思い過ごしよ」

「いや、違うね。ひとりで背負い込んで辛そうにしてるのが、僕にはわかるよ。だって、僕たち――」

繋がった者同士だから。互いに、隠し事は出来ないから。

あの夜以来、姉さんは笑顔で澄ましていた。でも残念なことに、それが表面だけの強がりなんだと、僕には嫌でもわかってしまった。本当は……姉さんは、いつだって泣きそうだった。

僕は、気づいていない振りをしていた。でも、放ってはおけない。だからこうして、騒がしい日常から外れて、ゆっくりと向き合いたかった。

「……ひとりで背負い込んでるのは、そうなのかもしれないわね。でもね、辛くはないのよ」

「そうだね。姉さん、まだ夢を追いかけてるんだもんね。僕には、もう諦めたって言ったのに……」

「ごめんなさい……」

「いいよ。別に、わざわざ報告する義務なんて無いんだからさ」

姉さんが強がる理由もわかっていた。

姉さんの中で燃えていたモノは、まだ消えていなかった。確かに、夢のために頑張っているなら、姉さんにとっては辛くないのかもしれない。

でも……一度否定された今、消えかかったそれをひとりで必死に守る姿が、僕には……。

「僕にはさ……見ている立場としては、辛いよ」

口にして、気づいた。辛いのは姉さんじゃなくて、僕のほうだった。

「以前のように、僕を頼らなくなったよね？ 僕のこと、そんなに頼りない？ あっ、姉さんのこと、格好悪いだなんて、全然思っていないからね？」

「そうじゃないのよ。兄さんに……これ以上迷惑をかけたくないんだもの……」

「……あのね、姉さん。それが迷惑なんだよ」

昂ぶる気持ちを抑え、僕は呟くように言った。

「こんな気持ちでいるくらいなら……姉さんと一緒に悩んで、苦しんで、もがいているほうがいいよ」

「ごめんなさい……」

「いいや……。もう、謝るのはよそう。何も、姉さんが悪いわけじゃないんだからさ」

互いの気遣いが交錯して、実に不毛だった。上手く絡まなくても、ふたり共謙虚なのは、双子として似ていると思った。

白い砂浜にこうして座り……正面には、ひたすらの、青。広い世界で、波音と、姉さんの手の温もりだけが、あった。

僕は正面を眺めたまま、姉さんの手をぎゅっと握り 隣の、姉さんの顔を覗き込んだ。

「僕には、姉さんのように立派な夢は無いよ。だから、姉さんのこと、全力で応援したいんだ。支えたいんだ。僕の心も時間も……僕の一生を、姉さんにあげてもいいって思ってる」

「やめて！ たとえ冗談でも、そんなこと言わないで！ ……何の考えも、何の覚悟も無いから、そんなに簡単に言えるのよ」

きつと、喜んでくれると思ったのに 僕の思いとは裏腹に、姉さんは、今にも泣き出しそうな表情で首を横に振った。僕から目を反らした。

僕は、再び正面を向いた。

「ごめん。言い過ぎたね……」

考えや覚悟を問われると、情けないことに、力強く頷けなかった。確かに、姉さんを想う一心から、衝動的に口走っていた。

それに、いきなりこんなコトを告白されて、姉さんとしても困るだろう。何かを成すために他者の一生を背負うのも、覚悟が必要だから。僕の生半端なそれだと、返って負担になるから。

僕は、姉さんのことを考えていたつもりだったのに……何も考えていなかった。

「それじゃあ……僕たち、別れたほうがいいのか？」

「……どうしてそう、極端なのよ」

「僕が、姉さんの負担になってるんじゃないかって……。ちよつとでも距離を取れば、姉さんが僕に迷惑を、だなんて感じないと思うよ」

近づいてダメなら、離れるしかない。

寂しいけど、それが姉さんのためになるのなら、僕は……。

「違うわ。私には、兄さんが必要よ。　って、言つて欲しいのよね？」

「ごめん……。そうだよ。確かめたかったんだ」

姉さんに意図を読まれていた。無理やりにも、そう言わせたかった。

「嘘じゃないわ。本当よ。兄さんが側に居てくれたから、ここまでやつてこれたんだもの……。兄さんには感謝してるし、これから私の側に居て欲しいわ」

それは僕への気遣いではなく姉さんの本心なんだと、わかった。

「それに私達……どれだけ離れたって、意味は無いと思うの。残念だけど、切っても切れない仲だもの」

そう。心が繋がっているんだから、距離なんて関係ない。

きつと、どれだけ離れていても僕は辛くなるだろう。

「なら……どうにもならないなら、向き合っしかないじゃない。そうよ、そうなのよね……。なのに、私っただけ……。ホントにごめん

なさい、兄さん」

姉さんは、ひとりで背負っていたことを改めて謝った。

「ありがとう。僕を必要としてくれて、嬉しいよ。でも」

こうしてここまで連れてきて、向き合って、話して、姉さんは素直になってくれた。

なのに、嬉しいはずなのに

「でも。僕には……姉さんのことが、わからないんだ……」

僕は、どんどん不安になる。

僕と姉さんは双子なのに。繋がっているのに。

慰める言葉が出てこなかったり、欲しいと思っていた言葉が違ったり　姉さんが、もうひとりの僕が理解できない。

そんな僕が一体、姉さんに何をしてあげられるんだろう。

「ねえ。海はどうして青いんだと思う？」

ふと、正面の海を眺めながら、そんなことを訊ねてみた。

「……空の青を映しているから？」

「違うよ。それだと、曇り空の時は無色になるはずさ。……海は海で、青いんだ」

海と空。青と青。ふたつの青で、景色はひたすらに青かった。

でも、ずっと遠くで伸びる水平線が、青を確かに二分していた。

ふたつの青は、同じ色なのに　似て非なるモノだった。

「でも、空の青を映していたらなって、僕は思う。一片の歪みもなく、鏡のように、何もかもを映せたらなって……」

水平線を境に、完璧な上下対称ならよかったんだ。

本来の色が無くてもいい。空の青を映せるなら、それでいい。

姉さんを、どこまでも理解したい。欲しい時に、欲しい言葉をかけてあげられるくらいに。

「ちえつ。悔しいな」

「……」

苦笑する僕を、姉さんはどこか悲しげな目で見ていた。

やがて陽は落ち、周りは暗くなった。

正面の夜空には、大きな満月が浮かんでいた。低く浮かんだそれは、今にでも海に落ちそうだった。

海面に映る月は、縦長に歪み、ゆらゆらと波に揺れていた。

「やっぱり、イビツだ……」

上下は非対称。やはり、綺麗な鏡のようにには映せなかった。わかりきっていたことだったのに……やはり、悔しかった。

「わぁ。綺麗ねー」

姉さんの手が、僕のから離れた。

姉さんは立ち上がり、海へと歩いていった。波際まで来ると、靴を脱いで片手で持った。

「ほら、兄さん。なんだか道みたいよ」

そう言いながら、海へと、浅瀬へと入っていった。

姉さんの言う通り、海面に映る歪んだ月が、暗い海に明るい道を作っていた。浜辺に居る僕らを導いているようだった。まるで、水平線の向こうまでも、どこまでも続いていそうな

姉さんは足首が浸かる辺りまで歩き、ふと立ち止まった。

「……私はね、鏡のように映せないからいいなって思うのよ。映せないからこそ、こんなに綺麗なのよ？」

僕に背を向けたまま、ぽつりと漏らした。

確かに、この月の道は綺麗というか、幻想的だった。歪むからこそ、はつきりと映せないからこそ作れる光景だ。

完全な上下対称だと、それはそれで、なんだか味気ないのかもしれない。

「ねえ、兄さん……。あの夜、泣いてる私に何て言ってくれたか、

兄さんは覚えてる？」

「ごめん。覚えてない」

不確かな感覚は、不確かな記憶を残していた。

いや、嫌な出来事を覚えていたくなかったのかもしれない。

姉さんにとつても辛い思い出のはずなのに……どうして今、掘り返そうとするんだろう。

「これまでの経験も努力も時間も、今後に生かすも殺すも、今後の姉さん次第だよ。姉さんならきつと生かせるって、無駄にはしないって、僕は信じてるから　って」

姉さんは振り返り、僕に答えを覚えてくれた。

姉さんに呪いをかけたのは、僕だった。

姉さんに再び夢を追わせ、ひとりで背負わせ、無理をさせたのは、僕だった。

間違いなかった。記憶が一瞬で蘇った。確かに、僕はそう言った。姉さんはきつと、背中を押した僕を恨んでいただろう。

「ありがとう、兄さん……。兄さんの言葉が無かったら、私はこうして、もう一度歩いてなかったわ」

大きな月と、月の道を背に　遠くからとても優しい笑みを浮かべ、浜で座っている僕に手を差し出していた。

それに縋りたくて　僕は立ち上がり、靴を脱ぎ、その手へと歩いた。

「そんな当たり前のコトに、私が気づくことは無かったわ。兄さんが気づかせてくれたのよ？」

私とは違う人間だから　と、姉さんは付け足した。

「いくら双子でも、鏡みたいに映せなくていいじゃない？　違う力タチに映せるからこそ、気づくこともあるのよ？　違うからこそ、足りない部分を補える。……だから支えられるんだって、私は思うわ」

僕は、姉さんの手を取った。もうひとりの僕の手を、再び握った。僕とは違う、確かな温もりがあった。

「そうだね。違うからこそ支えられるんだって……そんな当たり前のコトに、僕も気づかなかったよ」

それでいいんだ。

何も、難しく考えることはなかった。

ありのままの『僕自身』で支えればいいんだ。

そして、僕もまた、姉さんに支えられたい。

そうやって、互いに支え合いながら、一緒に居よう。

「これからもよろしくね、兄さん」

「うん。こっちこそ、姉さん」

まるで、初めて出会ったようにはにかみ合いながら……手を繋いで、遠くの水平線を眺めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4181v/>

asymmetry blue

2011年8月3日03時20分発行